

4. 日本放射線技術学会としての 取り組み

白石 順二 公益社団法人日本放射線技術学会代表理事

世界の中の放射線技術学

われわれ日本放射線技術学会(JSRT)が確立しようとしている放射線技術学という学問は、実は世界ではあまり広く知られておらず、似た研究分野である医学物理学が世界的には知名度が高いと考えられる。これは、欧米を中心とした海外における診療放射線技師の教育制度および卒業後の地位と、日本におけるそれらとの違いに大きく関係している。

1895年にレントゲン博士によりX線が発見され、そのすぐ後には放射線を用いた診療が始まり、放射線診療を行う医師(放射線科医)と、その医師のために診療に役立つ放射線画像を提供する診療放射線技師との徒弟制度が世界中で形成された。この文章を読まれる多くの方々十分に理解されているように、最適な放射線像を提供するためには、被検者の体型や疾患に合わせて、被検者に照射する放射線のエネルギーや量、人体を透過した放射線が検出器に届くまでの距離、さらには検出器の感度を考慮した上で、放射線を被検者に照射する必要があるが、それらのノウハウを凝縮した技術が放射線技術と呼ぶものである。日本では早い時期からこの放射線技術を学問としてとらえ、昭和初期の1940年代には、日本で放射線技師職人として働いていた人々が、互いの知恵と技術を出し合って、日本放射線技術学会という学術団体を立ち上げた。その動きは世界に先んじており、そのことが現

在の世界における日本の診療放射線技師の優位性を生み出したと考える。その後、欧米を中心に放射線治療分野での治療計画と線量測定において放射線治療医へのサポートを専門とする技術者の育成が必要となった1950年代に、医学物理士という職業が生まれ、世界の多くの医療機関では放射線治療を実施するためには医学物理士の存在が必要となった。しかしながら、その頃には、日本では診療放射線技師が、欧米では放射線治療の際に医学物理士が行うべきことを、日常の業務の中ですでに実践していた。その後、放射線機器の発展に伴い、被検者の被ばく管理や画像の精度管理を目的として、核医学や診断といった分野が医学物理士の研究の範疇に含まれるようになったが、これらについても、日本では、その前から診療放射線技師が研究として取り扱っていた。

このように、世界における医学物理学と日本における放射線技術学は、名称は違っても内容は非常に重複している。ただ、実際に患者さんに接する機会を持つ診療放射線技師として、被検者にとって安全で安心な放射線検査の実施を研究のエッセンスとして取り込むことができるというのが放射線技術学研究の利点であり、医学物理学研究との相違点ではないかと考える。しかし、学術研究の実践という観点から考えると、医療機関で診療業務の傍らに時間を割いて研究を行っている診療放射線技師と、機器や精度管理といった研究に密接につながっていることを日々の仕事とする

医学物理士とでは、医学物理士の方が研究に対する意識が高い場合が多く、その結果として、放射線技術学という研究分野は世界的に軽視される傾向にあるように考える。

日本放射線技術学会 80周年の歩み

前項で述べたように、JSRTは1942年(昭和17年)に、その当時、放射線技術に関する相互の情報交換と、技術向上を目的として全国に存在していた集団(東京に本部を置いていた「日本レントゲン協会」、関西を主軸としていた「日本放射線技術学会」、九州の「九州医学放射線技術学会」、東北の「東北レントゲン学会」、中部の「中部レントゲン協会」など)が大団結し、全国統一する形で創立された。しかし、この創立のきっかけとなったのは、その2年前の1940年に、放射線医学を主体とする医師によって結成された2つの団体「日本レントゲン学会」と「日本放射線医学会」が1つになって、「日本医学放射線学会」(JRS)を創立したことにある。それまでも放射線科医と診療放射線技師は徒弟関係にあったので、放射線科医の学会が統一されたことを受けて、技師の学会も全国統一するようになったというのは自然の流れであろう。事実、JSRTの創立後も5年間は技術学会の代表は副会長で、JRSの歴代の会長を名誉会長として迎え入れていた。さらに、年に一度開催されていた総会および会員研究発